

詩的考察：無意味さの意味について

高野 吾朗

パレード

脱ぎ捨てていた下着を再び身に着けながら 女が
男の方を 微笑みつつ振り返ると 美しい彼女の
顔の真ん中で 鼻だけが醜く歪んでいた 彼女の
裸体が徐々に隠れていくのをじっと見つめながら
男は再確認する 彼女と過ごす この時間だけが
この世でただ一つ信じられる 神秘体験なのだと
彼女さえいてくれれば まだ俺は 世界に抗って
あえて孤立するだけの勇気を保てるはず 自らに
何度もそう言い聞かせる男の裸体を一瞥しながら
女がおもむろに 例の話をもた始める これまで
交わったどの男にも 一度はしてきた あの話だ
「これは私が 子供の頃 とても仲良くしていた
三人の女の子のお話」 彼女はその三人のことを
アルファベットで呼びならわした 少女Aと少女
Bは 大人たちがこぞって「一生に一度しかない」
と熱く語る 国中を挙げてのパレードを ずっと
心待ちにしていた それは「天帝さま」の顔を

生で拝める おそらく唯一の機会であった Aの
両親は この「天帝さま」のことを 「この国に
差別を生みだした悪の源」と決めつけて 秘かに
毛嫌いしていた そんな両親を 物心ついて以来
Aは秘かに軽蔑していた Aにとって「天帝」は
全ての国民の心の傷を癒してくれる英雄であった
ありとあらゆる種類の「天帝」の肖像を 手帳に
貼り付け 夜中に独り それをじっと眺めながら
「天帝さまは私たちのために苦しんでおられる」
と 声にならぬ声で叫び 苦悶の表情の顔写真に
ねっとりキスをする それがAの日課であった
Bの父は Aが収集に熱狂している 「天帝」の
肖像写真の制作を長らく生業にしており それで
莫大な富を得ていた 彼の会社こそがその業界を
独占していたのだ 彼と結婚したことを 今なお
誇るBの母は日曜画家であり 家の中の至る所に
自作の「天帝」の肖像画を置いていた だがBは
そんな二人を軽蔑していた 「天帝さまは 何も
仰らないけれど 私にはわかる ご自分のことを
利用して 金を儲けている国民や ご自分の心
の中を想像できないくせに 大騒ぎばかりしている
国民のことを きっと憎んでおられるに違いない」
一方 少女Cはずっと孤独だった そして彼女は
「天帝」に全く無関心だった だから AもBも
Cにはただの 「天帝狂い」にしか見えなかった

しかし 彼女にできた唯一の友こそAとBだった
二人に好かれたいがゆえに 彼女らから「お前も
天帝を愛せ」「さもないと顔を殴る」と言われると
Cは従うしかなかった 殴られて 鼻が歪むたび
殴るAとBの顔が Cにはいつそう愛しく見えた
パレードの当日 三人はお揃いの血の色の服装で
固く手を握り合いながら 「天帝」を待っていた
大観衆の中 その姿を車の窓越しに垣間見たCは
その顔が男にも女にも見えて驚き その口が急に
「私を愛せなくてもよい 誰かを深く愛せるなら
それがおまえの天帝だ」と呟くようにさえ見えた
「天帝」がひどく謎めいて見えたBは 生まれて
初めて強烈に欲情した 「謎は謎のままで愛せ」
という心の声にBが聴き入っていると 突然Aが
残る二人を引きずって 「天帝」の車へ突進した
「我らの全ての苦しみのために もっと苦しんで
下さい」と叫ぶ彼女の手には凶器が握られていた
三人は顔を警備隊に殴られ AとBの鼻も歪んだ
「すると三人の体はどろどろと溶けて混ざり合い
赤い液体と化して道を汚したの」話し終えると
女は自分の股間の血を拭き アイマスクで 男の
両目を塞ぐ「天帝って 一体誰のこと？」と問う
彼の無知を まるで嘲るかのようだ「心の惑いが見えてこない？」と言われて欲情した男が 再び
キスを迫る 「鼻にならいいわよ 非国民さん」

何も見えぬ彼を抱きしめてやりながら 女はまた
考え込む 国民と非国民の境界は どこなのかと

三角関係

ベッドに横たわる人物は 瀕死の体であるにもかかわらず
天命によって 自分はこの世界でただ一人だけ 「いくら
死にたくても 死ねない人間として選ばれてしまった」と
今日も麻酔剤で恍惚とした状態で いつもながらに口走る

男装した女性なのか 女装した男性なのか よくわからぬ
この瀕死者のベッドサイドに佇むあの老人こそが 唯一の
介護者だ 皺まみれのその表情には 憐憫も哀惜も見えず
物陰から秘かに覗いている私には 鉄面皮としか思えない

私と瀕死者と老人の関係を 正確に知る者はこの世にない
私は瀕死者を敬愛し 崇拜し 身も心も捧げ尽くしてきた
その私から介護の権利を奪い去り 瀕死者の末期を勝手に
独占したあの老人は なぜか私と 容姿がそっくりなのだ

老人が手にしているあの新聞にも 「行方不明者」として
私の身長 体格 頭髪 服装 そして履物の詳しい情報が
載っているはずだ 病人の全身を襲う地獄のごとき苦痛を
長らく慰め続けてきた老人の心は いまや氷と化している

無理もない 瀕死者は苦痛の全ての原因を 老人の介護の
まずさのせいにしてばかりなのだ 「いつか奇跡が起きて

この苦痛がなくなるだと？ そんな愚かな祈祷にいつまでも
明け暮れるのはもう止めにして 有能な医師を連れてこい

よく効く薬を持ってこい」 再び老人は 心の中で秘かに
葬儀の予算と段取りを考え始める 「普通に呼吸ができて
普通に歩いて食べれて喋れるおまえが羨ましい おまえの
姿を見ているだけで 私の症状は悪化していくばかりだ」

早く死んでくれればいいのに 老人が再び 心の中で強く
念じる 「だがな こんなに苦しく辛いのに 私は永遠に
生き続けねばならないのだ 人類はもうすぐ死に絶えるが
私は独り生き残り 新たな人類を創らねばならないのだ」

その昔 瀕死者は 私にこう囁いた 「私の血をなめれば
おまえは不死の体となるだろう」 今こそあの老人を倒し
介護者となるのだ そう自らを鼓舞する私の声はあまりに
美しく 鏡に映る私の顔は 嫉妬のせいでもうにも醜い

背後からナイフで刺すと 突然の死の訪れに驚いた老人は
私の顔を見るなり 再び驚愕し 人生最後の言葉を吐いた
「いつか必ず おまえも手放すことの大切さを知るだろう
そして息さえも手放すのだ 生涯ここに監禁されたまま」

床に転がった遺体を見おろすうちに 私の心は 生まれて
はじめて 恥と罪の意識の恐ろしさに圧倒された 両手で

顔を覆う私に よろよると手を差し伸べ その手を静かに
はがしてくれたのは 誰あろう 微笑する瀕死者であった

それ以後の私の人生は この病室の中でのみ 展開された
瀕死者が天に召される時は 私も 殉死するつもりでいた
しかし瀕死者はずっと瀕死のままだった 「天国も浄土も
天には存在しないのだ この地にこそあるのだ その形は

無であり空だ」 それが瀕死者の口癖だった 私の介護の
おかげで 病人は苦痛からすっかり解放され おだやかに
微笑するばかりとなった 私の精神は瀕死者に完全に頼り
瀕死者の肉体は 私に完全に頼った そう あの日までは

歯車が狂いだしたのは 瀕死者のあの問いかけからだった
「危険を冒して この部屋に辿りついたおまえを 外では
多くの人々が 莫大な金と労力をかけて探しているはずだ
彼らに助けてもらいたいか」 「いいえ」と私が答えると

瀕死者は突如「嘘だ おまえの自己責任など無だ 空だ」
と 初めて私を罵り 自分の顔を両手で覆った その手
をはがそうとする老いた私の背後には 次なる行方不明者が
潜んでいるのだろうか 若きその手にナイフを持ったまま